

わらべうたにおける表現と生活世界の往還

根津 知佳子*

本稿では、わらべうたを「日本語を母語とする子ども達によって口伝えに歌い継がれてきた遊び歌」と規定し、ワークショップで収集したデータを小泉による10分類に基づいて整理した。のべ23名の小学生の表現には、生活世界が反映され、文化の成長過程が投影されたが、さらに子ども達の生活世界を把握するためには、わらべうたの概念そのものや分類の指標の捉え直しが必要となった。

「P : Poesia」「O : Orale」「L : Ludica」「P : Puerile」「A : Autentica」の頭文字から成るPOLPAでは、子どもが遊ぶ時の自発性や子ども自身による詩を重視している。サラボルサ児童図書館におけるアーカイブには「伝統的な歌」「イタリアの歌」以外にも「お行儀の悪い言葉の入ったふざけた歌」「ナンセンス」「外国語の歌」「何語が分からず、分類不明の歌」等がカテゴリー化されている。連携事業の関係機関やスタッフとの企画・実践・省察を通して「うたとしてのわらべうた」から「言葉としてのわらべうた」に転換することで、従前のわらべうた研究の対象となりにくかった現代の「子ども文化」を掬い集めることができる可能を見出すことができた。

キーワード：わらべうた、あそび、伝承、生活環境

1. はじめに

小泉（1994）によれば、わらべうたには生活環境が反映され、文化の成長過程が投影される¹⁾。であるならば、わらべうたを手掛かりとして、現代の子ども達の生活環境や文化の成長過程を探ることができるのではないだろうか。本稿の問いはそこにある。

本稿では、イタリアのわらべうた収集プロジェクトPOLPAに基づいた実践の経過を報告し、わらべうたを取り巻く課題を検討する。

わらべうたを厳密に定義することは困難であるが、伝統的な音組織や歌詞、遊びなどの要件を考慮し、ここでは小島（2009）による「日本語を母語とする子ども達によって口伝えに歌い継がれてきた遊び歌」と規定する²⁾。これにより、言葉や身体の動きを伴うことや、童謡や唱

歌は含まないことが明確な要件となる。尚、わらべうたの表記に関しては、「わらべ歌」「わらべ唄」等あるが、音楽性だけではなく言語性も重視することから「わらべうた」を用いる³⁾。

「日本語を母語とする子ども達」の発達過程において、乳児期には身体接触を伴ったわらべうたを通して人的にも物的にも安心で安全な環境を得ることができ、幼児期には粗大運動や微細運動を伴って様々な力を育むことが可能である。ともすると5領域の「表現」に該当する活動として捉えられがちであるが、その記載は『幼稚園教育要領』における5領域の「環境」における内容の取扱いにみられる（下線は筆者による）。

（4）文化や伝統を親しむ際には、正月や節句など我が国の伝統的な行事、国歌、唱歌、

*ねづ ちかこ 日本女子大学

①わらべうたや我が国の伝統的な遊びに親しんだり、異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて、②社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすること⁴⁾

ここで重要なのは、文化や伝統を親しむ際には、異なる文化に触れる活動が必要であるとしている点である（下線①）。そして、このような活動を通じて、社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えを養うことをねらいとしている。おそらく、わらべうたがこうしたねらいに有効であることを否定する者はいないであろう。しかし、わらべうたを用いて何かを身に付けたり、学ぶことを重視しすぎることによって、その本質が欠如してしまうこともある。では、社会とのつながりや国際理解の意識を視野に入れるためには、どのような環境を設定し、場を創出したらよいのであろうか。本稿は、従前のわらべうた研究にみられるような音律や歌詞の構造といったミクロ的な観点だけでなく、わらべうたのもつ社会的作用というマクロ的な観点を展望を試みるものである。

岩田（2016）は、高度経済成長期以前に「子ども文化」として伝承された「わらべうた」と、音楽教育を目的として創出された「新わらべうた遊び」の2つに分類し、後者は「子ども文化」としてのわらべうたにふりをつけるなどの変形をして大人が作成した教材であり、子どもの生み出した文化ではないとしている⁵⁾。しかし、どちらもリズム（ノリ）共有を喚起しやすく、子ども同士が相互に同調することのできる文化財であるとし、わらべうたを媒介として相互に響き合う関係の復権が可能であると述べている⁶⁾。

小島（2009）は、わらべうた実践を「A 楽曲演奏型」「B 音楽語法によるソルフェージュ型」「C 音楽語法による構成型」「D 経験の再構成型」に分類し、わらべうたの経験を通して日本伝統音楽の構成要素に対する知覚・感受を養うことができるD型が有効であるとしている⁷⁾。そして「経験-分析-再経験」による授業構成によって、遊びから学習への連続性や学年を通した発展性を実現できると述べている。岩田（2016）

と小島（2009）の研究は、対象となる子どもの年齢こそ異なるが、保育・教育現場においてわらべうたに内在する力を活用するための方法論を追究している点で共通している。

2. わらべうたプロジェクト POLPA

イタリアのエミリア＝ロマーニャ州のボローニャ（Bologna）は、ヨーロッパ最古の大学であるボローニャ大学（1088年創立）を有し、国際的な学会や文化行事が頻繁に開催される学園都市として知られている。古い証券取引場（Salaborsa）を改修したサラボルサ図書館は、歴史や文化の象徴でありボローニャの市民の憩いの場でもあるマッジョーレ広場に面しており、すべての人々に開かれた図書館である（写真1.2⁸⁾）。ボローニャは、エミリア街道の重要な交通の拠点として多様な文化が交錯することでも知られている。ボローニャ大学の教員や学生の利用はもちろんのこと、移民であっても簡単に図書館利用ができるなど、サラボルサ図書館は知の拠点としてだけではなく市民の居場所としての機能を担っている。

イタリアの詩人 Bruno Tognolini（1951-）は、ボローニャ市立サラボルサ児童図書館に「POLPA」と称するわらべうた収集プロジェクトで収集した100曲以上のわらべうたを寄贈した。サラボルサ児童図書館は、誰でもどこでもアクセスできるように音声データのアーカイブを公開している⁹⁾。このことにより、仮に図書館に直接足を運ぶことができなくても、POLPAのアーカイブ上のわらべうたの音声を聴くことが可能であることから、異文化圏から移り住んだ家族がわらべうたを通してイタリア語を学ぶことが可能になっている。

「POLPA」とは、「P : Poesia（詩）」「O : Orale（口伝えの）」「L : Ludica（遊戯的）」「P : Puerile（子どもの）」「A : Autentica（本物の、正真正銘）」の頭文字をとったものであり、子どもが遊ぶ時に自発的に歌う、子ども自身による詩を指している。Tognoliniは、その理念について以下のように述べている（下線は筆者による）。



写真1 マジオーレ広場に面したサラボルサ図書館



写真2 広場に面した入り口

これらの歌は、アパートの中庭や学校、公園の中で遊びながら歌われ、口で伝えられるもので、身体の動きや手拍子が添えられることによって一つの生きた形となります。これらの詩は、文字でなく声でできていて①、その芽が出て花が開いてからも、どんどん変化し、大人たちの視線の届かない身近な場所で進化していきます②。これらの詩は遊び心を保ちながら、一方でとても「真面目な」性質を持ち、空間と時間の流れに秩序を与えます¹⁰⁾。

Tognolini は、わらべうたを言葉として捉え「詩」を重視している。「歌詞」も「詩」も、言葉であるという共通性を持ちながら「歌詞」では音楽という時間枠における制限があるが、「詩」にはその制限はない。我が国におけるわらべうたの研究では、前者の「歌詞」や音楽性（メロディや音構造）に焦点を当て、時代や地域による相違や変容を調査する傾向がある。対して下線①のように「詩」に焦点を当てて音声データを蓄積している点がPOLPAの取り組みの独自性である。さらに特徴的なことは、わらべうたは伝承されるべきとする前提に立つ我が国の研究とは異なり、大人たちの視線の届かない身近な場所で子ども達が進化させること（下線②）を明記している点である。

3. 実践を通して照射されるわらべうたの実態

サラボルサ図書館と板橋区立中央図書館は、1981年に板橋区立美術館で「ポローニャ国際絵本原画展」を開催して以来、絵本を介した交流を続けている。本稿で報告する活動は、板橋区立中央図書館ポローニャ絵本係と日本女子大学社会連携教育センターとの連携事業として実施した2023年2月12日、9月10日、12月17日の3回の活動（以下、ワークショップと記す）と12月27日に開催されたポローニャ市立サラボルサ児童図書館におけるミーティングである¹¹⁾。

筆者は、板橋区立中央図書館とサラボルサ児童図書館とのオンラインミーティング記録（2022年10月5日）や映像・資料を基に活動検討を行い、2023年2月12日（日）に第1回ワークショップをファシリテートした。ワークショップは、2021年に移転改築された板橋区立中央図書館のホール（写真3）と図書館前のみんなの広場（写真4）で実施し、POLPAの理念である、遊ぶときの自発的な歌と子ども達自身の詩を引き出すことができるように「活動の自然さ」と「公園の自然」を意識した活動構成とした¹²⁾。

板橋区内の小学校へのチラシ配付を通して参加者を募集したが、図書館内のホールと公園での活動であるため引率の家族や一般の来館者などの見



写真3 『茶つば』¹³⁾



写真4 『ひらいたひらいた』¹⁴⁾

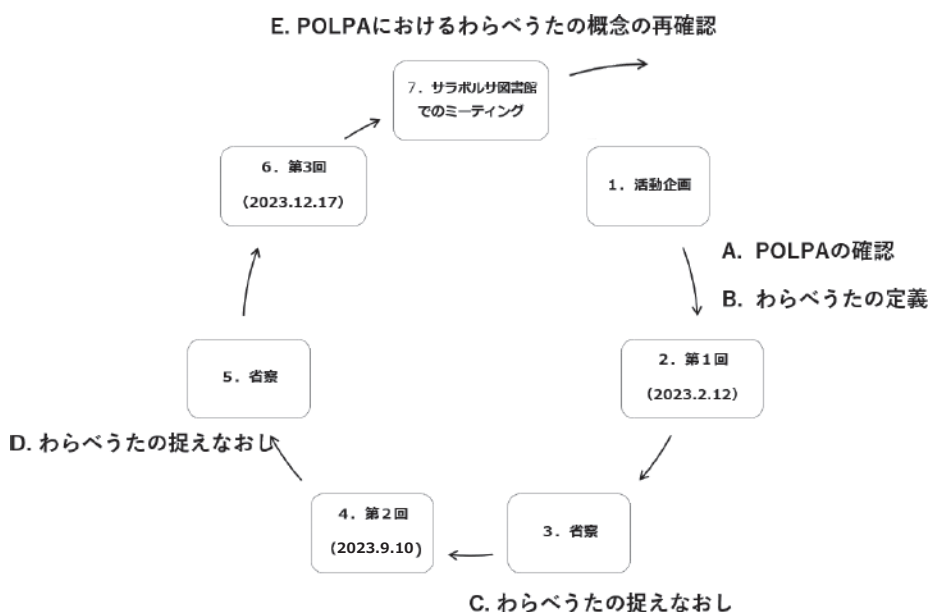


図1 POLPA 板橋における実践と省察

学や参加も受け入れることとした。以下、3回のワークショップを通して、のべ23名の小学生の音声データを収集することができた。毎回のワークショップには、図書館関係者2～3名、大学関係者1～2名、実践補助2～3名が参加し、全員で事前の打ち合わせと省察を繰り返した¹⁵⁾ (図1)。

3-1. 第1回ワークショップ (図1. 1～2 / A & B)

前述のように、わらべうたは唱歌や童謡とは

違い、子どもが遊びの中で伝承していく歌である。筆者らのわらべうた収集プロジェクト (以下、POLPA 板橋と記す) では、我が国のわらべうた研究で活用されている小泉 (1969) による10分類に依拠してデータ分類を行った¹⁶⁾。表1の上段は、その分類を示している。

ところで、平成20 (2008) 年告示の『第8次学習指導要領』には、低学年の鑑賞教材として「ア. 我が国及び諸外国のわらべうたや遊びうた、行進曲や踊りの音楽など反応の快さを感じ

表1 第1回ワークショップで収集したわらべうた¹⁷⁾

となえうた	絵かきうた	おほじき・石けり	おてだま・はねつき	まりつき	なわとび・ゴムなわ	じゃんけん ぐーちよき ばーあそび	お手あわせ	からだあそび	おにあそび	
どちらにしようかな	棒が一本あったとき			あんたがたどき	郵便屋さん	グーチョコキ パーで何つくろう	アルプス一万尺 (おちやらかほい)	ちやつぼ おしくらまんじゅう	だるまさんがころんだ	ひらいたひらいた
もういいかい	さんちゃんが ドラえもん 月				おちやらかほい グリコ・パイ ナッブル・チョコレート			お寺のおし ょうさん おせんべい やけたかな		

取りやすい音楽、日常生活に関連して情景を思い浮かべやすい曲」を取り扱うように記載されている¹⁸⁾。以降、教育芸術社の平成26(2018)年度改訂版の低学年の教科書に『あんたがたどき』や『さんちゃんが』が新たな教材として加わり、CDで鑑賞することが推奨されている¹⁹⁾。

第1回のワークショップで顕著だったのは、多くの小学生による『さんちゃんが』のパフォーマンスである(写真5, 6, 7)。改訂版の教科書には、絵かき歌である『さんちゃんが』の歌詞(楽譜1)と描き方の説明があり『あんたがたどき』には「さ」のタイミングで手を打つ指示が書かれている。ワークショップにおける『さんちゃんが』の出現の背景には『学習指導要領』や教科書改訂があることは明らかであるが、小泉の分類(表1)の「まりつき」を逸脱したその場でジャンプしながら「さ」のタイミングで

左右や前後に移動するという形態は、新型コロナ感染拡大の影響による活動制限による、という解釈もできる。

一般的に2020年以降の新型コロナ感染拡大による活動制限の影響が子ども達の表現に投影されているだけではなく、子ども達は音楽科の授業や教科書を通してわらべうたと出会っている状況であり、生活世界において「P: Puerile(子どもの)」「O: Orale(口伝えの)」の体験が不足していることがわかった。

『さんちゃんが』は「ア. 我が国及び諸外国のわらべうたや遊びうた」であり「反応の快さを感じ取りやすい音楽」「日常生活に関連して情景を思い浮かべやすい曲」である。この『さんちゃんが』の採択理由について4つの観点にまとめることができる²¹⁾。まず、最も有名な『棒が一本あったとき』は11工程あることから、低学年の教材として長すぎるのに対して『さんち



写真5 『さんちゃんが』に夢中²⁰⁾

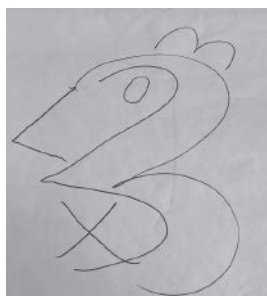
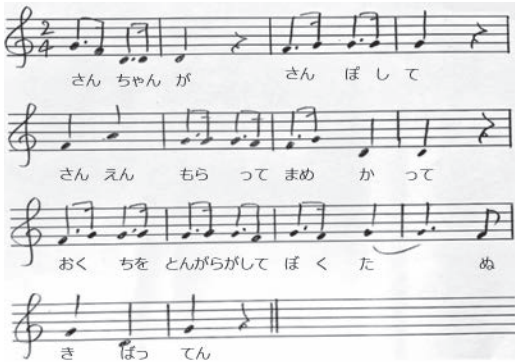


写真6



写真7

ゃんが』が短い点である。次に、『さんちゃんが』は、わずか6工程であることから、一人で机に向かって取り組むことができる点である。この2点からも、わらべうたが低学年の学習規律の基盤として位置づけられていることがわかる。また、14小節という短いメロディの中で、算数(数字の3)や図画工作(豆や×)、そして国語(aやoの発音)と関連づけることができることも重要な観点である。国語に関連して、教師用の指導書には、「言葉の頭の発音をはっきりと」「あ段とお段で始まる言葉は、口をはっきりあける」「やさしい気持ちで歌う」と記載されている。



楽譜1 『さんちゃんが』²²⁾

4点目として挙げられるのは、長2度(ファ-ソ)、長3度(ファ-ラ)、完全4度(ソ-レ)などの音程を一人で遊びながら身に付けることができるため、音楽科の教材として適している点である。

以上のように『さんちゃんが』は、様々な記号(数字・ひらがな・図形)に触れることができるコンパクトな教材であり『1ちゃんが』『2ちゃんが』と数字を替えることはできるものの、中学年以上の子ども達が主体的な学びを拡張できるような実践の創出は困難である。図2は、集团的活動システム(Engeström, Y. 1987 山住、2009他)に依拠して『さんちゃんが』を介した学びを図示したものである²³⁾。

ワークショップでは『さんちゃんが』を知ら

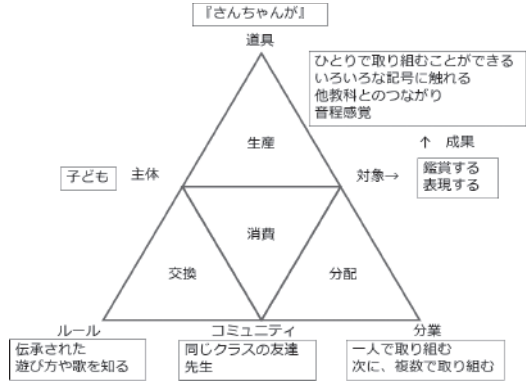


図2 『さんちゃんが』の教育的ねらい

ない家族やスタッフに子ども達が教えるという新規の役割転換が発生した(図3. 右下三角形「分配」)。学校で学んだわらべうたを異なる世代に伝えるという活動は、古い文化財を目上の人から「伝えてもらう」「教えてもらう」のではなく、世代の異なる人に「伝える」という点で新たなタイプの「O: Orale (口伝えの)」の萌芽活動と考えることができる。さらに、学校で習ったことを正しく伝えることが動機づけとなり、子ども達同士で絵かき歌の工程を確認し合う様子もみられた。このことは、むしろ低学年用のシンプルな教材であるからこそ伝承・伝達の拡がりを可能にしたと考えることができる。また、描くたびに表情が異なることに気づく姿もみられた(写真8)。

自身の経験から、『あんたがたどこさ』イコ

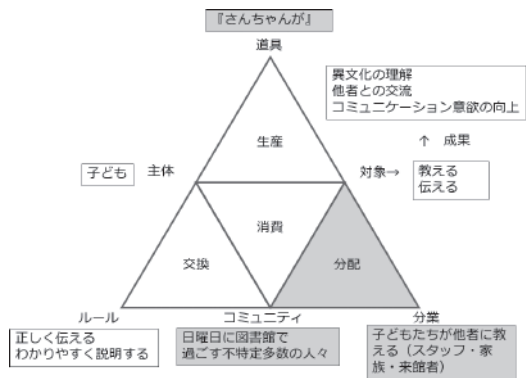


図3 新たなタイプの伝承

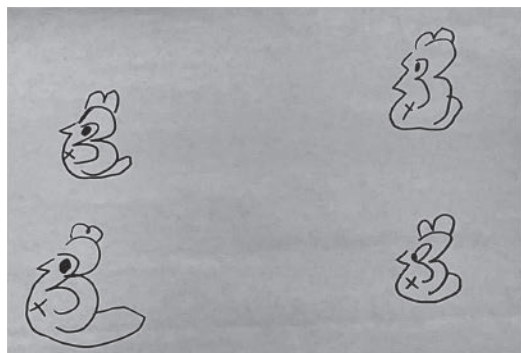


写真8 描くたびに違う表情になっていく「たぬぎ」

ール「まりつき」と、ステレオタイプに思い込んでいる大人に新しい遊び方（その場跳びジャンプ）を教えるという構造も図3と同様である。

3-2. 第2回ワークショップ（図1. 3～4 / C）

第1回ワークショップで収集したデータは、板橋区立中央図書館を通してポロニャのサラボルサ児童図書館に報告された。多様な記号（ひらがな、カタカナ、漢字、ローマ字、図形等）を用いる絵かき歌が日本特有の文化であることを再認識し、第2回ワークショップは、絵かき歌収集を中心とした活動構成とした。

その結果、TV番組やインターネットで知った絵かき歌（例「ドラえもん」）や外来曲による手遊び歌（例「アルプス一万尺」）が子ども達の自発的なパフォーマンスを誘発することがわか



写真9 『ドラえもん』²⁴⁾

った。特に手遊びでは、学年が上がるにつれスピード感のある複雑な動きを伴ったパフォーマンスが繰り返された。一方、室外で遊ぶ体験の少ない子ども達にとって「なわとび・ゴムなわ」や「おにあそび」は、非日常的な遊びであるのか「これは、ただの遊びでわらべうたではない」という発言もみられた²⁵⁾。

以上から「日本語を母語とする子ども達によって口伝えに歌い継がれてきた遊び歌」「言葉や身体の動きを伴う」「童謡や唱歌は含まない」というわらべうたの要件の捉え直しと発達段階による差異の検討が求められた（図1. D）。

テレビやインターネットが普及している現代では、刺激的な絵かき歌や手遊び歌の情報を得ることはとても簡単である。しかし、子ども達はあくまでも受け身であり「L : Ludica（遊戯的）」「P : Puerile（子どもの）」「A : Autentica（本物の、正真正銘）」な体験が不足している。そこで、第1回と第2回ワークショップの「みんなで歌おう！わらべ歌」というタイトルを「歌って遊ぼう！わらべ歌」に修正し、能動的な身体の動きを伴った活動を軸としたワークショップの企画を行った。

3-3. 第3回ワークショップ（図1. 5～6 / D）

3回のワークショップで収集した音声データ71件を整理すると35曲にまとめることができる（巻末表2）。『だるまさんがころんだ』や『グリコ・チョコレート・パイナップル』のように遊び方がほとんど変わらない「からだあそび」もあれば『いろはにこんぺいとう』から『がちゃがちゃとまれ』に歌詞が変化した遊びも見られた。「からだあそび」の多くは2音構成であるため音楽的な発展を期待することは難しいものの、身体の動きに合わせて一人ひとりのリズムやテンポで活動できるという利点があることを再確認できた。今後、パーソナルテンポという観点と、後述する「言葉は身体で遊ぶためのおもちゃで、身体の方は言葉で遊ぶためのおもちゃに当たる」という観点からの議論が期待できる。

Tognoliniによれば、子どもが楽しんで歌い、声もしっかりしていてスピード感がある場合は、「A : Autentica（正真正銘の）」であるとされ



写真10 『がちゃがちゃとまれ』²⁶⁾



写真11 『かごめかごめ』²⁷⁾

る²⁸⁾。ところが、第3回ワークショップでは、フレーズが長い『はないちもんめ』や『かごめかごめ』のパフォーマンスにおいて「おふとんかぶって」「おかまかぶって」「てっぽうかついで」の歌詞を知らない子どもや次のような勘違いもみられた。

「かごめかごめ かごのなかのとりは」 →
「かごのなかのとりいは」

「つるとかめがすべった」 →
「つるとからすがすべった」

このことは、POLPAの重視する「P: Puerile (子どもの)」「P: Poesia (詩)」「A: Autentica (真正銘の)」が不足していることを象徴している。

3-4. サラボルサ図書館におけるミーティング (7/E)

2023年12月27日(水)に Nicoletta Gramantieri (児童図書館総責任者・司書)と、POLPAプロジェクト担当のクワント・バスタ (QB Quanto Basta) に所属する Franca Mazzoli (教育担当、総括)、Alice Ruggero (PLAY LISTEN 活動担当)、Laura Francavilla (音楽活動担当) および青山愛氏 (通訳) の計6名でミーティングを行った²⁹⁾。イタリアにおけるPOLPAとPOLPA板橋におけるわらべうた実践の相違は以下の2点である。

まず、イタリアでは教科書でわらべうたを取り上げることはなく、あくまでも生活の中で伝承されている点である。これは「日本語を母語とする子ども達によって口伝えに歌い継がれてきた遊び歌」「言葉や身体の動きを伴う」「童謡や唱歌は含まない」等の要件や小泉による10分類では、文化の成長過程が投影されることは難しいことを示唆するものである。岩田 (2016)の言及する、高度経済成長期以前の「子ども文化」の衰退状況を把握することはできても、現代の子どもの生活世界がわらべうたにどのように反映されているかを確認するためには別の尺度や指標が必要になる。

次に、『鐘がなる』『Are you sleeping?』として世界中で共有されている『フレール・ジャック』について、輪唱曲として日常的に歌声を重ねる遊びとして定着しているイタリアと『ゲーチョキパーでなにつくろう』のように手遊びとして普及している日本との文化差を確認した。フランス民謡を基にした『ゲーチョキパーでなにつくろう』は「新わらべうた遊び」と同様、大人が振り付けした遊びである。当然ながら従前のわらべうたの要件を満たすことはできないものの『サンタクロース』『ラーメンタンメン』『あんぱんしょくぱん』等の多様なバージョンがあることから、文化の成長過程を投影することのできる遊びである。中学年以上の子ども達が好んでパフォーマンスをした『アルプス一万尺』も同様である。

これら2点を受けて、Tognoliniによるアーカイブの分類カテゴリーに則ったわらべうたの概

念を再確認した（図1.E）³⁰⁾。

数え歌、手遊び歌など
お行儀の悪い言葉の入ったふざけた歌
ナンセンス
伝統的な歌
イタリアの歌
外国語の歌
何語が分からず、分類不明の歌

多言語性や文化の多様性を背景とするポロニーヤの分類カテゴリーを援用すると、POLPA 板橋で収集した全データの分類が可能となる。従前のわらべうたの要件を満たさず、表2に記載できなかった音源もデータとして蓄積することができる。例えば『グーチョキパーでなにつくろろ』『アルプス一万尺』等も Tognolini に依拠するならば、新たな視座でその有効性を論じることができるだろう。

子どもの詩は遊ぶ時に歌う。何かを習う時には、遊びの要素が必要だ。でも遊ぶために遊ぶのも必要だ。子どもの詩は、言葉のおもちゃやお人形のようなものだ。数え歌や複雑な手遊び歌を歌う時、言葉は手で遊ぶためのおもちゃで、手の方は言葉で遊ぶためのおもちゃに当たる³¹⁾。

前述したように、身体の動きを伴うわらべうたにおいては、一人ひとりのリズムやテンポが異なることを確認できる。この点に「言葉が身体を動かすためのおもちゃであり、身体が言葉で遊ぶためのおもちゃになる」という観点を加えることによって、言葉に焦点を当てた実践の検討が可能になる。なぜならば、Tognolini は「真正銘のわらべうた」を「今使用されている通貨」として例え、次のように説明しているからである³²⁾。

今の時代を生き、今、飛び交っているものことである。記憶の網の中にひっかかっている死んだ蝶は対象とならない。これらの詩が実際に子どもによって作られたかど

うかは問題とはならない。内容も聖人のことだったり、遊びの詩だったり、特に内容のないもの、広告の詩がもとになっているもの、詩人の作その他、多種多様である。

Tognolini は、子どもの詩を書き留めることを「虫の標本をピンで留める」ことに例えている³³⁾。POLPA 板橋では、音声データが重要であり楽譜に書き起こす必要がないのは、POLPA 板橋が「わらべうたの標本」づくりではないことを意味している。Tognolini は「詩とは、歌いながら街から街へ飛び交う生きた蝶」であると例え³⁴⁾、「言葉というおもちゃで遊ぶことにより、遊びを通して言葉をより楽しく、より深く学ぶ」ことのできる可能性について論じている³⁵⁾。「言葉を学ぶということは、世界の色々な地図に親しむことに等しい」という視座は、文化の伝承に偏らず、社会への意識や国際性への意識の芽生えを展望しつつある近年の我が国の幼児教育や保育に示唆を与え得るものと考えられる。

本稿では、「音楽としてのわらべうた」から「言葉としてのわらべうた」という捉え直しによって、子ども達の生活世界や文化の成長を検討することができる可能性を見出すことができた。本プロジェクトで創出した萌芽的な活動をどのように地域連携や学校教育に活用できるのかを検討することが今後の課題である。

註

- 1) 小泉文夫(1994).『音楽の根源にあるもの』平凡社.
- 2) 小島律子(2009).「学校教育におけるわらべうたの再考—「教材」としてのわらべうたから「経験」としてのわらべうたへ—」『大阪教育大学紀要 第V部門』第58巻 pp.44-45
- 3) 英語表記についても、「nursery rhythm」や「children's song」など諸説あるが、小島(2009)では「warabe-uta of traditional children's game-songs」と表記されている。
- 4) 文部科学省(2017).『幼稚園教育要領』p.15. および、文部科学省(2018).『幼稚園教育要領解説』p.201
- 5) 岩田遵子(2016).「今、わらべうたを実践する意義—響き合う関係の復権をめざして—」『幼児音楽研究』幼児音楽研究会機関誌 第60号秋号 pp.22-23

- 6) 岩田 (2016). 前掲論文 p.25
- 7) 小島 (2009). 前掲論文 pp.43-55
- 8) 2023年12月27日筆者撮影
- 9) <https://www.bibliotecasalabora.it/ragazzi/home-bs-br/bambini-anteprima/polpa>(2024年3月6日最終アクセス)
- 10) ボローニャ市立図書館のホームページ掲載のパンフレット(森泉文美氏翻訳)による。<https://www.bibliotecasalabora.it/ragazzi/documents/il-progetto-p-o-l-p-a>(2024年3月6日最終アクセス)
- 11) 2022年10月18日付で日本におけるPOLPAプロジェクトがスタートした。
- 12) 日本女子大学ホームページ。https://www.jwu.ac.jp/univ/jwu_times/2023_0317_01.html(2024年3月6日最終アクセス)
- 13) 写真提供. 日本女子大学社会連携教育センター
- 14) 写真提供. 前掲13による。
- 15) 板橋区立中央図書館ボローニャ絵本係から2~3名、日本女子大学社会連携教育センターから1~2名が毎回参加し、データ収集や撮影を担当した。日本女子大学学術研究員、川見夕貴と日本女子大学家政学研究科児童学専攻、小田桜乃と竹内和子がデータ収集、撮影、データ整理等を担当した。
- 16) 小泉文夫(1969).「わらべうたの研究 共同研究の方法論と東京のわらべうたの調査報告」わらべうたの研究刊行会。
- 17) 表1の右端の『ひらいたひらいた』は、複合的な活動のため分類していない。
- 18) 文部科学省(2008).『小学校学習指導要領(平成20年告示)解説 音楽編』p.39
- 19) 2023年9月30日に行った教科書編集者1氏へのインタビューによる。また、この調査内容について根津がインタビューを受ける形式で、茶谷莉那(2024)「今日のわらべうたと子ども達」2023年度日本女子大学家政学部児童学科卒業論文。第2章第1節「今日のわらべうたの調査」pp.22-37に掲載されている。
- 20) 写真提供. 前掲13による。
- 21) 前掲19の調査による。
- 22) 教育芸術社.『平成27年度 おんがく 指導用CD』より筆者が採譜(2023年11月1日)
- 23) Engeström, Y. (1987). Learning by expanding: An activity-theoretical approach to developmental research.Helsinki: Orienta-Konsultit.
山住勝広ほか訳(2009).『拡張による学習—活動理論からのアプローチ』新曜社。
- 山住勝広(2017).『拡張する学校—協働学習の活動理論』東京大学出版会。
- 24) 写真提供. 前掲13による。
- 25) 公園での遊びの後に「いつ、わらべ歌をやるんですか?」という男児からの質問に象徴されている。
- 26) 写真提供. 前掲13による。
- 27) 同上
- 28) 前掲10. ボローニャ市立図書館のホームページ掲載のパンフレット(森泉文美氏翻訳)による。
- 29) 森泉文美氏のコーディネートにより、2023年12月27日イタリアボローニャのサラボルサ児童図書館にてミーティングおよびインタビューを行った。
- 30) 前掲9.この分類はアーカイブ上でも公開されている。
- 31) 前掲10. Ludia(遊戯的)に関する説明
- 32) 前掲10. Autentica(本物の、正真正銘、現行の)に関する説明
- 33) 前掲10. 採集の基準に関する説明
- 34) 前掲10. Maestria Plurale『複数のわざ』に関する説明
- 35) 同上

表2 収集したわらべうた(網掛けはサラボルサ児童図書館アーカイブ)

曲名	小泉による分類
このゆびとまれ	0. となえうた
どちらにしようかな	0. となえうた
どれにしようかな	0. となえうた
ゆびさりげんまん	0. となえうた
1ちゃん	1. 絵かきうた
2ちゃん	1. 絵かきうた
3ちゃん	1. 絵かきうた
4	1. 絵かきうた
どうえもん	1. 絵かきうた
へへのもへじ	1. 絵かきうた
あんたがたごこさ	4. まりつき
いろはにこんべいとう	5. なわとび・ゴムなわ
赤坂小波	5. なわとび・ゴムなわ
がちゃがちゃとまれ	5. なわとび・ゴムなわ
ゆうびんやさん	5. なわとび・ゴムなわ
グリコ	6. じゃんけんゲーチェキパーあそび
アルプス一万尺	7. お手あわせ
おちんちんかい	7. お手あわせ
お手のおしょうさん	7. お手あわせ
縄路は続くよどこまでも	7. お手あわせ
おおききこき	8. からだあそび
おしくらまんじゅう	8. からだあそび
おせんべやけたかな	8. からだあそび
けんぱ	8. からだあそび
きつぽ	8. からだあそび
つぼんだつぼんだ	8. からだあそび
なべなべこめけ	8. からだあそび
ひらいたひらいた	8. からだあそび
かごめかごめ	9. 鬼あそび
かごめかごめ(船とカラス)	9. 鬼あそび
だるまさんがころんだ	9. 鬼あそび
はないちもんめ	9. 鬼あそび
もういいかい	9. 鬼あそび
北風小僧	
船向はぶう	